

平成21年5月10日
パリ産業情報センター
駐在員 酒井 裕史

一般調査報告書

世界最大規模の産業技術見本市、ハノーバーメッセ

<2009年のハノーバーメッセ>

4月20日から24日にかけて、ドイツ・ハノーバー市において、ハノーバーメッセ2009が開催されました。ハノーバーメッセは複数の専門見本市を一つにまとめた総合見本市であり、世界最大規模の産業技術見本市であると言われています。今年のメッセでは展示スペースだけで約22万5千㎡が使われました。



専門見本市の構成は隔年ごとに変わります。今年の専門見本市のテーマは「国際計測・制御・自動化」、「産業用部品」、「エネルギー」、「マイクロテクノロジー」など13分野にも及びました。世界的な経済停滞の影響もあり、同様の構成で開催された2年前に比べて約250社減少しましたが、それでも世界61か国から約6,150社が展示ブースを出展しています。

主催者発表によれば、今年の来場者は約21万人であり、「世界的な経済停滞の影響を受けてはいるが、予想を上回る入場者数であった」とのことでした。この来場者のうちの25%はドイツ国外からの外国人であり、アジアからの来場者も5%(約1万人)を占めるそうです。

もちろん、日本からも数多くの企業が参加しており、日本人の来場者も少なくありません。今年の場合は、日本企業約50社が出展し、1,000人前後の日本人来訪者があったそうです。(独行)日本貿易振興機構(ジェトロ)でもブースを設置し、日本企業による欧州での事業展開を支援しました。

<ハノーバーメッセの歴史>

ドイツにおける見本市(メッセ)の歴史はたいへん古く、12世紀まで遡るといいます。その歴史を反映し、今日における開催件数も多く、世界の主要な見本市の約3分の2がドイツで開催されていると言われています。

そのなかで、ハノーバーメッセの歴史は意外に新しいものであり、第二次世界大戦後から始まります。

1947年に開催された第1回のメッセは、戦災による荒廃が著しかったドイツ経済の復興策の一環としてイギリスが主導する形で開催されたものでした。メッセがハノーバー市で開催されることとなった理由の一つには、イギリスの占領下にあり、なおかつ戦災を免れた大きな建物(もともとは工場でした)が存在していたことがあったといえます。(ドイツではもともとライプツィヒが見本市開催都市として有名でしたが、第二次世界大戦後は分割されて東側に属することになったため、その「代わり」の場所を選定する必要があったのです。)

記念すべき第1回のハノーバーメッセには約1,300社が出展し、4,000人のバイヤーが集まりました。一方で、戦災により宿泊施設が不足していたため、市内の23の学校を休校にして宿泊所に充てたそうです。また、この第1回の見本市で、1,934件、3,160万ドルの商談が成立したとされています。

その後、ハノーバーメッセは規模を拡大し続けながら毎年開催されます。国際見本市としての発展も急速であり、第4回(1950年)に初めての外国企業の出展があつてから、1959年には早くも出展者のうち約17%が外国企業で占められるようになりました。(2007年には、外国企業の出展がドイツ企業の出展数を上回っています。)こうして、ハノーバーメッセは戦後のドイツ経済全体の復興に大きな役割を果たしたにとどまらず、世界中の製造業の発展に大きく寄与するものとなったのです。

なお、日本からのまとまった出展は1964年に始まり、この年には電気分野で15社が日本から出展したそうです。

産業見本市は、常に産業の最先端が集まる場所です。そのため、ハノーバーメッセにおいても各専門見本市の内容はその時々最先端分野の変遷に歩調を合わせて改変されてきました。メッセに含まれていた個別の専門見本市が規模を拡大して、独立して開催されるようになることもありました。つまり、メッセ自体も時代に合わせて形を変えながら今日に至っているのです。

なお、本年のハノーバーメッセは第63回目にあたるものでした。

<ハノーバー国際見本市会場について>

世界最大の見本市会場で広さは約100万平方メートル。展示ホールが27棟もあるほか、本社ビルやレストラン、サービス施設があり、その総面積は49万8千平方メートルと世界最大規模です。ちなみに、世界の見本市会場の面積トップ5のうち4つまでをドイツ国内の見本市が占めていますが、ハノーバーの会



場が2位に大きな差をつけて最大の面積を誇っています。(ドイツ国外の会場では、第3位にミラノ・フィエラ展示場が入っています。)

ハノーバーメッセのような大きな見本市が開催される際には、非常に多くの出展者・来場者を迎えるので、会場そのものが都市としての機能を持たされています。そのため、30以上のレストラン、警察署、郵便局、電話局、銀行、スーパーマーケットが会場内にあるほか、美容院・教会までもが設けられています。交通アクセスについてもたいへん充実しており、会場敷地に隣接して、鉄道駅(ドイツの新幹線ICEも停車します)市内から乗り入れる市電駅、バスターミナル、ヘリポートなどが配置されています。

今日のこの見本市会場の充実ぶりの背景には、この見本市会場が2000年に開催されたハノーバー万博の会場となったことが挙げられます。この万博開催に合わせて、施設全体の拡充・改修が行われたため、今日のような現代的で充実した姿になったとのことです。なお、27の展示ホールの中の1号館は、その面積が7万3千平方メートルもあり、世界最大の展示ホールとしてギネスブックにも載ったそうです。

<ドイツ産業見本市株式会社>

ドイツ産業見本市株式会社は、ドイツの見本市運営会社で唯一の株式会社で、ハノーバー市とニーダーザクセン州がすべての株式を保有しています。従業員数は約850名、世界60カ国に代表部があります。年間に約100の見本市および展示会を主催・運営していますが、この内の約20以上がハノーバー以外で開催される国外見本市であるとのことです。なお、この会社が手掛けるすべての見本市・展示会を合わせると、計2万5千以上の出展社、200万人の来場者になるそうです。年間2億5千万ユーロ(約335億円:€1=¥130で計算)の売り上げを上げる一方、資産面でもハノーバーの見本市会場百万平方メートルとすべての建物を所有するなど、立派な大企業になっています。

ドイツの見本市は、多くの場合、州政府・市などの公的部門が出資・運営する「公設民営」型の組織によって開催されています。この背景には、見本市の開催こそが輸出産業育成についての最大の方策であると認識されていること、民間だけでは大規模場インフラを継続的に整備・維持することが困難であること、多くの人が集まることから開催都市・地域産業の活性化効果が期待できることなどが挙げられます。

一方、日本における見本市は、個別業界団体、メディア関連企業による主催が多いことが特徴になっています。

<まとめ>

今日、産業見本市は分野・場所・規模を変えて、それぞれ特色的な内容をもって世界のあちこちで開催されています。

これは、産業見本市が企業同士の出会いの場・コミュニケーションの場であり、具体的な商談・取引が行われる場として有効であると認識されていることによります。同時に、その時々時代にもっとも注目を集めている産業分野がテーマとして設定され、そこに新たな技術・商

品・サービスが数多く出展されることで、出展者・来訪者が共に最先端の産業技術に触れることができる場でもあります。このようなことから、見本市は、いわゆる「旬の産業情報」、「旬の企業」についての情報が世界中から集まる場になっています。

愛知県産業情報センターでは、最先端の産業情報の収集、本件地域に進出する可能性のある企業の発掘について、今回ご紹介したハノーバーメッセのような見本市・展示会を活用していきたいと考えています。